

# Glocal Tenri



7

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.17 No.7 July 2016

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
記憶を風化させないために  
／高見宇造…………… 1
- ・ 天理教教理史断章 (106)  
北野文書⑧「おさしづ」の写し翻刻  
／安井幹夫…………… 2
- ・ 『教祖伝』探究 (25)  
反対するの可愛い我が子  
／深谷忠一…………… 3
- ・ 「おふでさき」天理言語学試論～「こと」  
的世界観への未来像～ (27)  
第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事  
の学」②  
／井上昭夫…………… 4
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (14)  
「み」について④  
／佐藤孝則…………… 5
- ・ 「おふでさき」の標式的用法 (11)  
「そうじ」について②  
／深谷耕治…………… 6
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (17)  
第1巻の「個人の上・事情」の伺いにお  
ける「道」②  
／澤井治郎…………… 7
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (7)  
ライシテの歴史④  
／藤原理人…………… 8
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (39)  
救済の多様性 生長の家③  
／山田政信…………… 9
- ・ 地域福祉を拓く ―新たな寄付文化の創造  
― (19)  
義援金と支援金①  
／渡辺一城…………… 10
- ・ 遺跡からのメッセージ (13)  
イギリス滞在記⑨ ストーンヘンジと日  
本考古学の恩人ゴーランド  
／桑原久男…………… 11
- ・ 教学と現代―これからの社会と天理教 (3)  
現代の家族の姿とそのゆくえ  
石飛和彦…………… 12
- ・ 図書紹介 (96)  
『女性活躍「不可能」社会ニッポン』  
／金子珠理…………… 13
- ・ English Summary…………… 14
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 15  
国際自殺予防学会 & 日本自殺予防学会に参加  
(八木三郎)／第58回印度学宗教学会学術大  
会に参加(澤井治郎)／『グローカル天理』  
合本のご案内／『グローカル天理』年間購読  
のご案内／「地域環境保全功労者」環境大臣  
表彰を受賞(佐藤孝則)／平成28年度「公  
開教学講座」(ご案内)

## 巻頭言

### 記憶を風化させないために

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

5月27日、オバマ大統領が米国の現職大統領として初めて被爆地広島を訪れ、平和記念公園の原爆慰霊碑に献花し、追悼の演説を行いました。核兵器のない世界実現に向けて「いかに困難なものであろうとも絶え間なく努力を積み重ねていくことが私たちの責任だ」と述べ、歴史的な一日となったのです。大統領は訪問の思いについて「我々はこの都市の中心に立ち、爆弾が落ちた瞬間を自ら想起し、目の前の光景に困惑する子どもの恐怖を自ら感じる。いつか証言する被爆者たちの声は聞けなくなる。それでも1945年8月6日の朝の記憶を風化させてはならない」と語りました。私も強く共感を致しました。

私自身も平和記念公園を訪ねる度に、黙祷を捧げ想起する者の一人です。今、『人類の明日のために』(広島教務支庁編・道友社発行・昭和55年)を読み返していますが、これは広島教区管内の被爆された信者の方から聞き取りをされたものです。岸本敏明広島教区長(当時)は序文で「な お生々しい被爆体験と、脈打つお道の信仰の真実さに触れた時、これをそのまま消滅させてはならない、何とかして書き残さなければならぬという使命感のようなものを、ひしひしと覚えた」と記しています。こうした労作が本教にはあるのです。

一部ですが紹介をします。大前正巳さんは「遙か東の方の広島市上空に見たのは、真っ赤な大きな火の玉でした。瞬間的に私は、太陽が炸裂した、と感じました。―これは大変なことになった。もうこれで十柱の神様の御守護は滅亡した。もうこれで暗闇の世界になってしまうんだ―正直、そう思いました」と語ります。神村キヨノさんは「私はあの瞬間、爆風で四、五メートルも神床の方へ飛ばされ、ちょうど中央の拍子木の円座の上に両足を伸ばして座る格好になり、背中側に八足があつてその上にお

社がひっくり返っていた」。神村さんは折しも身ごもっておられ、ちょうど産み月でしたが、その中、をびや許しを頂いて無事に出産しておられます。「無数の人が亡くなっていく中で、新しい一つの生命が誕生しました。『教祖、ありがとうございます』私はただただ、お礼申し上げるばかりでした」と語っています。

また大火傷を負った当時14歳の沖正夫さんは「祖母が毎日のようにおさづけを取り次いでくれました。その時の真剣な祖母の態度には驚きました。こう神様をお願いして言うのです。『この子は将来教会長になる子です。世界だすけといわれる中で、世界に行つてどういう人とかかわり合わなければならぬかわりません。どうかすつきり治してもらいたい』みんなが今日の日をどう生きようかという状況の中で、よくも世界だすけということを考えられたと、その信念には今もって驚きます」と語ります。また氏の御尊父は「田舎に引っ込んで何をしとるんだ。こういう時にこそ広島に出て困っている人を助けるのがつとめじゃないか」と信者さんから励まされ、疎開先から広島に戻り、遂に教会を復興されるのです。また森本イツヨさんは「人心は復興のため自分のことに精一杯のころ。布教に行つて笑われもしました。しかし、足腰の重みを残しながらも、そうすることが私に課せられた神様のつとめと信じ、歩き続けたものです」と語り、「8月6日のことはいくら話しても、その場にいたものでないとわかつてもらえないだろうと思います。それは実際にあったことです。同時に、もう二度と人々の上にあつてはならないことなのです」と結んでいます。戦後71年を数えますが、こうして被爆の中をもお通り下された先人の信仰を私たちは風化させることなく後生に語り伝え、今、この道を通らなければと強く思うのです。